

報



會

會 岳 山 本 日

78

月 七 年 三 十 和 昭

山の繪の傳統

中村清太郎

古人は山といふものをどう描き現はしてゐたか、それを知り且味はふのは、山を描く者にとつては言ふに及ばず、苟も山を愛し山を崇ぶ人々にとつて、また大きな悦びであらうと思ふ。古代の遺品を觀てゐるうちに、偶そこに山の姿が現はれた時などは、それ丈で既に胸の躍るのを禁じ得ないものがある。

數年前朝鮮に遊んで、數々の古美術や文化の遺品に接し、その優秀さに驚嘆した、其折のこと。平壤から程遠くない江西の地に、名高い壁畫のある古墳を訪ねたが、之などは全く想像以上の立派なものだつた。而かも其處に思ひがけない山の繪があつたのである。

大きな花崗岩の切石で築かれた玄室の四大壁には、四神（朱雀、青龍、玄武、白虎）が夫々大きく描かれてあるのだが、それから上が圓天井のやうに組上げられ、その持送石の長押やうの部分に、横長く東西相對して、山が描かれてある。凸元たる山には處々針葉樹が生ひ、遠い峯は雲に浸り、天には斷雲が飛び交ひ、風が舞ひ、之に神仙の駕してゐるものもある。眞に山は時ち雲は飛んでゐる。この外、天人、異獸、草花、種々の文様等が室内處々に描かれてゐる。

が、總じて、天地を畏敬し自然に親和するといふ東洋人特有の思想情感の現はれと見るべく、殊に墳墓の事であり、風水説などの信仰によるむづかしい理由もあるのであらう。實に氣魄の満ちたものがあり、いかに立ち去り難い思ひがした。

この壁畫は微細に叩かれた石面に直接描かれて居り、大體銳い——而かも力の抑揚を持つた——線を主としたものだが、色彩も豊富で、それが地下の薄明りの中で、鮮やかに底光りしてゐる。顏料は密陀僧であらう、油性のものに違ひなく、土を透して天井から洩つた雨水にも、甚だしくは損せられてゐない。

製作の年代は學者に依て高句麗の盛時——支那南北朝から隋初にかけて、恰もわが飛鳥時代、今を距る千三百五十餘年前——と推定されてゐるやうで、全く法隆寺壁畫などと比べても、種々の點で此の方が古いといふことは肯かれる。さうすると淺學自分の知る限りでは、我國で山が描かれてゐる遺品のうち最も古いものではあるまいか。

尤も法隆寺の玉蟲厨子の臺座に、やはり密陀で描かれた、佛典による須彌山や本生譚の山の圖があり、年代は之も飛鳥とされてゐるから、その何れが古いかに至つては、私には判定が付かないけれども、兩者は十分に性質が異ひ、山といつても厨子の繪は著しく裝飾的且つ幻想的であり、あの古墳の壁畫の遙かに自然的

なとは同日には論じられないやうに思はれる。だから「山らしい」を描いた遺品の最古のもの——といへば、この古墳壁畫に落付くかも知れない。今では愈々交通の便もよくなつてゐるから、同好の士の踏査をお奨めし度いと思ふ。

尙ほ佛教美術の中には、山川草木は成佛の教へだけに、相當山の姿が顯はれて来る。奈良大佛の蓮辨に刻まれた須彌山圖を始め、淨土變相や來迎圖等の中に、佛殿の障屏にも掛軸にも數多く残つてゐる。中で宇治鳳凰堂の屏繪や種々の山越の彌陀像などには、大和あたりの如何にも悠つたりした青綠の山が描かれてゐるのも面白い。

藤原から鎌倉の繪卷、殊に信貴山緣起などには、大分寫實風の山が出て来る。宋元の山水畫には、夏珪や高然暉の水墨の山が雄渾な姿を残し、わが雪舟や相阿彌の山も或は嚴めしく或は優しく、その佛を止めてゐる。それから大雅堂のものに至つて、愈々寫實の生き生きした趣が加はつて来る。大分前に高野山で見た、たしか「傳大雅」となつてゐたかと思ふが、一方巖頭に偃松に似た横？が蟠屈し、一方には雲に埋るゝ遠山を描いた一雙の屏風は、忘れられない感銘を残してゐる。

以降浮世繪を経て近代のものになると、西洋畫法の渡來と共に益々寫生の風が盛なるにつれ、山の描かれる機會も難常に多くなる。その代り

元來山國の日本だから、風景を描けば自然に山が入つて来る位のものだし、一方傳統の情勢から自家中毒の氣味もある。況や近代の文化は動もすると自然に對して忘恩者の態度を

主要目次

- ★山の繪の傳統……中村清太郎(一)
- ★ダック・バンガローの事ども(一)……湯淺 敏(二)
- ★偶 感……額田 敏(三)
- ★ヒマラヤ便り……(四)

K2
ナンガ・バルバット
エヴェレスト

★一九三三年の攻撃(四)
“Camp Six”より

★山の名・山の地名(一)
……白馬 耕(六)

★エヴェレストには果して固有なる西藏名ありや
……吉澤 一郎(七)

★會員通信——ウエストン氏他……(九)
★夏山情報——山日記追補……(一〇)
●會務報告……(一一)

とる傾向がある。その時特に山に愛着し山を尊崇する人間があつて、山を主座に据え、改めてその美と力と徳を探り、究め、讃えようとするのも偶然ではないのであらう。

(昭和十三年五月)

ダック・バンガローの事ども

I

湯 浅 巖

ヒマラヤの雄大な景観は山づれのせぬ印度への漫遊者や、暑熱を避けて山岳地帯に寄り集まる印度平原在住の文明人にとつて大きな魅力である。彼等の多くは山そのものに心身を打込んで水雪の世界を我がものとせんとする野心などなく、ただ山の魅惑に迷されてふらつと山中にやつて来て、数週間の山の靈氣に心の慰安を求め遠く天空高く連立する白銀の嶺々を崇高、驚異な眼で眺め悠久たる大自然を崇拜し讃美するのみに満足するさまじい人達である。

この様な人達の集まる地域は、ダーズリン地方、カシミール近傍、及びシムラ、アルモラ方面に限られてゐる。此處に集つた旅人や避暑客はさらに山に憧れて此の山の都會を中心に思ひ思ひにヒマラヤ探勝に足を向けるのである。

ヒマラヤ山麓にはこのやうな人々の旅の宿として印度廳直轄又は州管轄の完備した山小舎即ちダック・バンガロー (Duck Bungalow) (此のダック・バンガローの本来の使用の目的は古い時代に印度廳或は州の役人が山奥の巡視の際に於ける休泊所となつてゐたものであるが、現世になつて山の讃美者研究家に開放される様になつたのである。それ故に此のバンガローの使用に當つては必ず

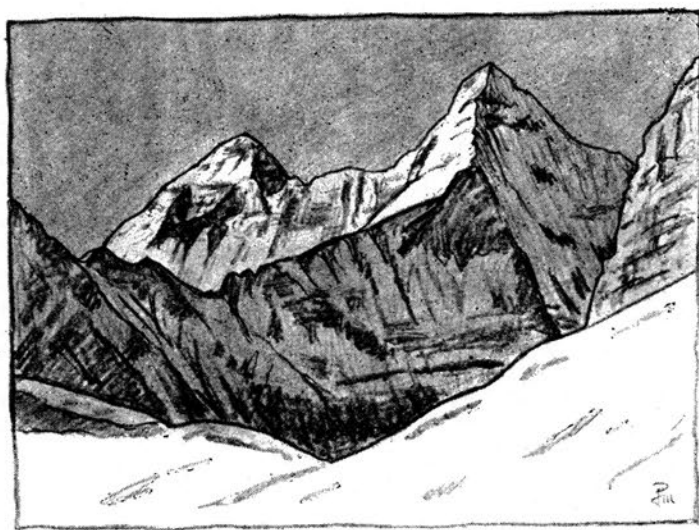
デプティ・コミッショナー (D. C.) に使用願を出し役人の公用に使用されてゐない場合に限りバスを下附される。此のバスを持つてゐるとバンガロー宿泊優先権がある。又は鐵道會社經營の Retiring Room 或は町村營のダラムサラ (旅人宿泊所) District Board House, Rest House 等が散在してゐる。ダラムサラ以下は極めて粗末な然かも不潔なもので止むを得ない場合を除いては一般に餘り使用されてゐない。以下一九三六年ナンダ・コット登攀の往復途次宿泊したアルモラ地方のダック・バンガローに就いて述べて見よう。

ダック・バンガローもビン・からキリ迄あつて一概に云へないが、避暑地、或は町にあるものと、村や又は山中にあるものの二つに大別出来る。然し何れのバンガローも構造、設備其他は殆んど似かよつたものでたゞ前者の方がいくらか後者より優れてゐる點が多いといふのみである。

【位置】山の都會或は町の雜香を避けた静かな町端れに芝生の奇麗な眺めのいい處に建てられてゐる。山奥のバンガローは鄙びた山村の端れの小高い丘の上か氷河から流れ出る清冽な水の音高い谿間などにある。

【建物の構造・設備】石造りの赤いトタン屋根の瀟洒な姿とそれを繞

る廣々とした清楚な芝生、婉麗を競ひ良香を漂はす花壇、片隅に恰好に植えてある大きな古いヒマヤ杉、ぐるりと此を取巻く低い積石の塀此のバンガローの姿は我々にいついっ迄も瞭りと心に深く焼付けられる迄印象が深く我々の氣持とびつたり一



致するものがある。

建物及び室内の大きさ、構造、装飾、附屬品等何處も殆んど似かよつたものである。石疊の廣いベランダに出られる様に各室 (二つ或は三つ) が隣り合せになつて各室の奥に附室のある浴室、便所が設けられてゐる。

バンガローには別棟があつて其處はチヨキダール (管理人——料理人を兼ねてゐる場合もある)、メタ (掃除人——山奥のメタの居ないバンガローの使用人は必ずメタを同伴しなればならない規則がある) が住んで居り、同時に同伴したカンサマ (料理人) の腕を振

う料理場である。

各室には寢臺、卓子、椅子等山の中とは思はれない贅澤なものが備つてゐる。マントルピースの上の棚に鐘詰の空鐘に野生の花を一束入れて置くと室内は急に明るいそして和やかな氣分が漂ふ。寢臺は鐵製であるが中は米綿絲が荒く組んであるものでさほど固い床でなく、些少であるが柔味のある寢床である。何れのバンガローでも毛布は備へてない。我々は常に山用の羽根のシヌラ一フザツクを用ひた。寢臺は一室に二つある。山のバンガローは大抵二室で寢臺が四つなので五人のパーティだつた我々は、誰か一人は犠牲に

なつて石床の上にちかちかに寝なければならなかつた。此の場合ジャンケンで決められる。負けた奴は別段大した苦にもならないといふ様な額付でゴソゴソと寢袋に入る。事實床上では多少冷えるかも知れないが内地の山小舎で寝るのとは格段の差だ。こんな事になれ切つた我々には寢臺があるのが却つて贅澤な様な氣持がする。たゞ他の文明人や常に石床の上に寝てゐる土人などに對する杞憂とか體面とかが我々にあるのみである。

浴室には鍼力で作られたバス (湯ぶね) があつてチヨキダールに申込むと二安那で一杯湯を入れて呉れる。恰も行水の如き風情であるが、高地特有の暑熱の中の一日の長い徒步旅行に汗と塵埃にまみれた身を洗ひ清めるには此の上もない有難いものだ。浴後の爽快な氣分を一層加へるものは赤々と燃える燐燐と甘いダーズリン・ティーだ。マントルピースが有効にその役目を發揮して實用に使はれるのを經驗し、その上壁一杯に擴がる熱氣と赤黄い力強い焰と、薪火が發散するかさかな、香ばしい木の奥の漂ふ燐燐の心持よい味を旅路の夜毎々々に充分味あふ事が出来た。石油ランプはチヨキダールの居るバンガローには備付けられてゐる。確か一晩二安那の使用料であつた。贅澤な英人の旅行者は各自室内の裝飾品を持參して一夜を心持よい居室にしてゐる様であるが、我々

山男には古風なランプの黄色い燐きとパチ／＼と音をたてて燃え盛る燐燐の外に何物も欲するものはない。

〔食料・料理〕 バンガローの旅には必ずカンサマを同伴しなければならぬ(但し町のバンガローには專屬のカンサマが居住してゐる)。その日／＼異つた土地のバンガローでカンサマの作り出す食事は我々のどんなに楽しみとしてゐた事であつたか。カンサマは朝食の始末を済ますとサツサと身仕度を整へて唯一人バテイより先にそのバンガローを出て今夜の泊りのバンガローに先著し、朝我々が注文した料理の材料を町ならばバザーで、山奥の村ならばサルカルバニヤ(政府御用商人——州知事の指定した食料品屋——州知事に入山前に申込むと手配をして呉れる)或は村々の人家から買ひ入れて料理を始めるのである。バテイがバンガローに着く頃はもう「燐燐」の鍋はぶつ／＼と沸きかんばんしい米飯や強いカレーの香りが料理場から漂つてきてゐる。我々が内地の山旅で、その夜の榮の事や炊事の事を考へながら歩いてゐるのは遙かに異つた境遇だ、一風呂浴びて炎々と燃える燐燐邊で長椅子に身を凭らして今日の旅程の思出を頭に浮べてゐると、「サプ・カナ」と猥雑な顔にも柔かな笑ひを浮べて食事が次ぎ／＼と運ばれてくる。

パンガローに於ける我々の主食は印度米及びロティであつた。印度米のバサ／＼した舌ざわりは始めはなか／＼咽喉に通らなかつたが、毎日食つてゐるうちに其の獨特の味が我々の口に合ふ様になつた。白米の水分あるものより却つてあつさりしてゐる様に思はれた位だつた。ロティはマイタ(米の粉の入つたもの)と呼ばれるもので、丁度ホツト・ケイキを薄くした様なものである。アルモラで始めて食つて以來の珍味は皆の愛好するところとなり、朝夕の食事にはなくてはならないものとなつた。又晝食には内地より用意してきた固パンより寧ろ此のロティを愛用した位だつた。ロティは普通そのまゝ喰うものであるが、我々はジャム或は砂糖をつけて喰つてゐた。山奥に入るにつけマイタは少なくアッタ(黒く麥の入つたもの)になるがマイタより味はぐつと落ちる。ロティは印度人の常食であるがその種族や宗教或は地方によつてその製法が種々異つてゐるのは、其の生活より起る境遇、習慣、に依るものであるが面白い事だと思つた。

次は副食物について我々が喰つたもののみを述べる。タルカリ(ジャガイモ)はどんな邊鄙な村落でも手に入れる事が出来たので毎度の食事に缺かした事はなかつた。タルカリはカレー粉と食鹽で味をつけギ(羊・水牛・山羊から製したバターの種類)でいためて食ふのである。印度人は此の中にミルチャ(唐辛子)——氣候から起る習慣と思ふが印度料理には必ず此のミルチャが混入してゐる。印度人の重要な嗜好品——を入れて喰ふ。米は常に印度獨特のカレーに用ひられるのは云ふ迄もない。本場のカレーの味は實際に味つた者でないと解らない、口や筆では到底傳へる事は出来ない。カレーの一種でダールといふものがあるが、これも時々喰うと變つた味がしてうまい。町でもバンガローでも普通通カレートを注文すると、前記した様にミルチャを入れてくるので、その口中を焼付ける様な辛さに一口も咽喉を通らないから必ず「ミルチャ・ネー・マント」云ふのを忘れてはならない。カレーの中味の肉類はムルキ(鶏)が一番高價なものである。町以外のバンガローでは全然手に入れる事は出来ない。山に入ると小羊が羊の肉である。此等是如何なる山奥の村落に行つても、或は人家のない野にも飼つてゐるので、バンガローに著くときつと一匹は血祭に擧げる。良いところのみカレーに入れ、残りは串刺焼として一匹餘すところなし喰つてしまふ。小羊、羊は山中に於ける唯一の肉類であり、印度人にとつては一番高價な食ひ物である。然し宗教によつて絶対に喰ふ事の出来ない奇妙な習慣もある。兎に角印度をめぐる宗教上の習慣はあらゆる生活の要素に影響して、我々には未だに其の眞意を掴む事は出来ない。印度に遊ぶ者は必ず此の宗教の謎を研究しなければならぬ。(續く)

山をより深く觀んとし、より深く考へんとし、より密に山に接せんとする氣持を満たすためには、山での如何なる困苦にも堪へ、その困苦に克つだけの力がなければならぬ。

其の計畫を、裝備を、その實行を總て自分達のみで行はなければならぬ場合が多い、ことに常に、より大きな山を求むる者に於て。

我々の智識が如何程迄山の自然を解し得るかを明に知り、我々の肉體が自然の恐威に對して如何程迄堪へ得るかを確實に體得しなければならぬ。

斯くして、より高い山へ自分を引き上げるには如何なる訓練を必要とするべきかを知り得るのである。

斯くして、更に如何に山を考へなければならぬかが解り、自然は人により大いなる途を開き、より深く山に入るを許す。

より大いなる山を求むることも、より高き山を求むることも單に形式上のものではない、

心の底に、より大いなる山を求めより深く山を觀、より高き山を求むるのである。

心に求めた山は、更に身を以て之を實踐しなければならぬ。如何なる場合にも左様ではあるが、山に登ることは最も實踐を尊ぶ。

萬難を排して實行せんとする強き力と、大自然の威力に對して敢然挑戦する烈々たる闘志と、これを實行する頑強なる肉體との三昧一體的の融合により、自己の心の内に山を見ることが出来る。

そして山を通して永遠の生命を感じる事が出来る。人の尊さを知ることが出来る。

斯くの如き境地に至りて始めて、山はより大きく、より莊麗なることを眞に知り得るものであらう。

斯くして、始めて、嶺を吹く風の音にも、梢に鳴く鳥の聲にも、咲く花の色にも、流るゝ水にも、大自然の生命が満ちてゐることを明に知り得るであらう。

斯くして、自然の恐威に對して自己の困苦を征服し得るのである、心に求めたより大いなる山へ眞に登り得るのである。

然し求めし山の頂に立ちても自然に對する謙讓の心を忘れてはならぬ



ヒマラヤ便り

米國遠征隊K2へ

近着のタイムス紙に依れば米國カラコラム遠征隊が、K2（ゴドウィン・オースチン峯）偵察の目的で既にカシミールの首都スリナガルを出發したと云ふことである。同じK2を目標としながら一年一國許可制のためにわが國からの遠征隊が實現するに到らず、今年はこの米國隊のみの活躍に委せねばならぬことは遺憾な次第だが、この隊の動きは、それだけ我々にとつて注視を要するものであらう。

同遠征隊は一九三六年ナンダデヴィへ赴いたC・S・ヒューストンをリーダーに戴き、名目は米國山岳會によつて後援されて居るが個人的に支援されて居るらしく、科學班を伴つて居ない。一行のルートはアブルヂカやコンウェイ卿等の路と同様スリナガルからシンド溪谷に入り

ジョージ・ラを越へてドラス溪谷に沿ひインダス本流をスカルドーまで行き、同地からアスコリーに到り、バルトロ氷河を溯行更に左折してゴドウィン・オースチン氷河に入つてK2山麓に到着し山稜を試登して登頂の可能性を確かめようとする豫定らしい。登攀には六名のシエルバをダージリンから呼寄せベースキャンプ迄スリナガルから約三百哩（隊はこれを二十五日間で行の豫定）の道程の荷物運搬には六十名の苦力を使用すると云ふことである。

ナンガ・バルバット

去る四月十三日、パンジヤブ・ヒマラヤの雄、ナンガ・バルバットに向けミューンヒンを出發したパウアーを隊長とする一行七名の獨逸ヒマラヤ遠征隊は五月五日ボンペイに到着、以前其の通過を拒絶されたと評さされてゐたカシュミールの首途スリナガルを經由、六月二日にラキオット谿谷の一六七〇〇呎の地點にハウプト・ラガーを設け、同月五日には早くもラガー（I）に食糧品の運搬を終つてゐた。十一日、登攀隊後援の英國駐屯軍當局はスリナガルから三時間の飛行距離にあるH・Lに百封度の食料及び備品を投下無事任務を果して基地に歸つた。

九日、一七六一八呎にI・（II）を

建設したが二十一日に至り悪天候の爲め一まづH・Lに引き返しひたすら天候の回復を待つてゐた。二十七日のスリナガル發同盟によると、此のL・（III）を通過した一行は二〇三四〇呎の地點にL・（IV）を建設し、愈々ジルバー・ザツテルへの山稜進出準備を固めてゐるらしい。

此の間飛行機による食料、郵便物等の投下は三回に亘つて行はれ、短波無線に依るL・（IV）とH・Lとの連絡も非常に順調に行はれてゐる由である。エヴェレストに於ける英國隊は既に引上げを決意したとか、然しナンガ・バルバット地方の天候は東のエヴェレストとは大部異な様であるから、獨逸隊の方は、其の後消息の來ない所を見ると、着々征頂に向つて果敢な登攀を行つてゐるものと思ふ。パウアーにしては初めてのナンガ攻撃ではあるが、過去に於ける彼の豊富な經驗とその沈着さ、統制能力と云つたものからすれば、今年は何とかなり相な氣がしてならぬ、然しそれも結局最後は天候の問題だけになるのであるから、吾々は唯、彼等の上に幸運の神の與せられん事を祈る許りである。（吉澤）

エヴェレスト今年も断念

テイルマンを隊長とする本年度エヴェレスト遠征隊は既報の通り小遠征隊主義によつて登頂を目指したが、遂に第六キャンプを建設したのみでモンスーンの到來早きため登攀

繼續を断念して下山するに到つた由である。未だ詳報を手にしないうたため断片的消息を綜合して不取敢こゝに記す。

本年度遠征隊は四月六日ロンブク氷河附近にベースキャンプを設け、既にこゝで一九三三年度のベースキャンプ到着よりも十日以上早く登攀準備を開始し、第一キャンプは東ロンブク氷河の先端一八、〇〇〇呎の地點に建設、第二、第三キャンプも豫定通り建設を見た。シエルバ三十名も登攀のために選ばれた。

四月中のエヴェレストの天候は良好で寒氣厳しいが、陽光に恵まれて居るため堪へられぬ程ではなく風は相當強く山側を吹きまくり登攀隊の状態は例年に比して悪くはなかつた。

第三キャンプ建設後スマイス、シプトンの兩猛者がノースコルに向つて登路偵察に赴いた結果、積雪状態は比較的悪かつたとのことである。その後消息不明であつたが、六月三十日カリボン發同盟電報に依れば登攀隊はこのノースコル征服にも成功して一九三六年度よりは遙かに好調に進んで二萬七千呎に第六キャンプを建設したが、モンスーンが例年より早く到來したため積雪甚しく、しかも快晴と例の北西風に恵まれぬため、この雪を融かすことも、吹拂ふことも望めない有様で、遂に最後の攻撃に移ることが出来ず、脊丈け以上の積雪に恨を残して退却と決し

たと云ふことである。第六キャンプ二萬七千呎は正確な數字ではないが、大體一九三三年度の二萬七千四百呎の地點と同じではないかと想像される。今年も懸案の第七キャンプ

登山團體聯合會の國際會議フラハに開催の事

去る六月八日附の書狀でチエコスロヴァキヤの山岳會から、來る八月二十八日から三十日まで、フラハで國際山岳會議を開くが、日本山岳會でも誰か出席しないかといふ親切な通知があつた。詳細のプログラムは組織委員會の方から後刻送るとの事であるが、會議が終つてから出席者打揃つてプラチヨヴの岩山やボーランドとの國境にあるハイ・タトラの山々へ小登山を行ふ計劃らしい。

どういふ團體がこの聯合會に加盟して居り如何なる人々がこの會議に出席する事になつてゐるのか一切不明であるが孰れあゝ近所の國々の山岳會の人達に違ひない。一觸即發の状態にある中歐の國々でも山男だけは仲良く恁んな會議を開いたり山へ行く所などは、何だか吾々にも解る様な氣がするだけに愉快である。

は實現されず從來の最高到達地點までも近付くことは出来なかつたわけである。いづれ詳報を待つて更に報告をしよう。（島田）



一九三三年の攻撃(四)

—エヴェレスト—

“Camp Six”より

吉澤 生

兎もあれ天気は上乘であつた、胸壁の蔭及び支溝の向側の壁には少しの風もなく太陽はザリ／＼と灼くやうに照りつけ、私の體力と決断力とを破壊し去るかの如くに思えた。私は牢獄の様な、壁に取圍まれた大きな洞穴の中から、怎うしても通れる事の出来ない囚人と一つも變らなかつた。敵意を含んだ岩が、私の力なき努力の上に傲然と迫つてゐる。上の壁は殆ど、しかる許りになつて、暗黒の層は累々と重なり、其の相は洵に不動の、然し無情の、力の權化ともいふべきものであつた。絶頂は見えなかつた、假借なき岩板、此の陰鬱な場所を離れてあの絶嶺の上に立ち得たならば！然し岩板を横切り得て頂上に向ふ登攀者は肉體的の疲労と同時に精神的の疲労にも

打勝たなければならぬのである。私は兩腕を胸の高さに横げて前にある雪を掻きはじめた、それは私の後に控えてゐるクールワールをシューシューと滑り落ちて行く、傾いた棚が出て兩膝をその上へ持つて行き身體をすり上げるまでには數分間を要した、そして牧師の前の歎願者の様な恰好で私は暫く急激に酸素を呼吸してゐなければならなかつた、それから一度努力して注意を拂ひ乍ら眞直に立ち上つた。

その上の小さな棚に登るには、まだ澤山の雪を拂はなければならなかつた。怎うして此の骨の折れる雪掻き仕事の必要のない段に來た時には全くホツとした。然しエヴェレストでの慰安は實に果敢ないものである。次の棚は峻坂へ斜めに落ち込んでゐる數呎の深雪の中にあつた、而もその雪には少しの粘着性もなかつた。

突然、私は停止しなければならなくなつた、それは心臓や肺の過勞を休める爲めではなく、雪の中へ突込んでゐた手が、手袋はしてゐたのであるが、無感覺になつて、氷斧を滑り落しはせぬかといふ心配が起つたからである。

雪掻きは實に疲れる勞働であり、而も一向に捗らない仕事であつた、従つて私は、唯感覺のみに頼るより外はなかつたのである、詰り私は、足場が出て來るまで岩板の雪をどけるといふよりも、雪の下に足場を見

つける事を、全然足に委せつきりにしてゐた、といふ譯である。

勿論こんな事の危険は充分承知してゐる、出來る時には氷斧の先端を岩の割目に押込んで應急の支へにして居たが、此の注意は私をカタストローフから免れしめたに違ひないと思つてゐる。一ヶ所非常に傾斜した一枚岩で深く柔い雪に蔽はれた所があつた、其處では膝まで潜つて了つたが、最初の足探りで確りした痛を見付け出した、私は氷斧で上に登り、その先端を半時許り薄い割れ目に突込んだ、それから注意を拂ひ乍ら私はもう一方の足をその痛の上に持つて來ようとし、同時に全體重を前の足にかけた。後の足が前の足と一緒にならうとした瞬間、痛が何等の豫告なく崩れて了つた、そして兩足は滑つて體重は氷斧だけにかゝつた、次の瞬間私は足の位置をなほして別の足場を發見した、之等は全く瞬間的な出來事であつたので、私の鈍い頭ではそのゾツとする様な恐怖を氣に留めるだけの餘裕がなかつた、私はただ本能的に行動しただけで、事件が突發したと思つた時にはもうすっかり收つた後であつた。

私は今、心と身體とが離れてゐる様な、人間的でない不思議な精神狀態で登つてゐる、それが爲め、傷痕が癒つたといふやうな感じは全然なかつた。それは丁度、私の一部分が傍に立つてゐて、もう一方の部分の努力してゐる姿を看守つてゐる様で

あつた。

此の精神機能の低下は酸素の不足と、疲労にあるものと思はれるが、前者の方が主たる原因であらう。之は非常に危険な精神狀態で、酔拂ひが自動車を運轉してゐる時の精神的反作用に比較出來よう。運轉手は自分の判断力が少しも損はれてゐないものと信じ、そのみならず、いつもよりも却つてもつと上手に運轉出來るときへ思つてゐるのであるが、實際には統計及び輕罪裁判所の報告により、此の狀態が一番事故を惹き起し易い事になつてゐる。

丁度グレイト・クールワールを横切る前に私は時計を見た、その時は十時だつた、今再びそれを見ると一時間過ぎてゐる、然るに登つた高さと言へば五十呎を出でない。絶頂の方の比較的容易に見える場所まで出るにもまだ／＼雪の深い難所を三百呎も登らなければならぬ、恐らく之からでも尙、一時間或は二時間位登る餘裕はあるかも知れない、然しそれが何の役に立つといふのだ結局身心共に疲れ果て、引返す餘力を無くして了ふのが關の山である。

私は敢へて腰を下ろさうとは考へてゐなかつたが、立つ事の出來るだけの場所を拵える爲めに、圍りの雪を掻き除けた。私の居る位置は、グレイト・クールワールと支溝とを分けてゐる胸壁のすつと上の高みであつた、今まで苦勞してゐた、そして今も尙そこに居る所は、丁度岩の帯

の下に當つてゐる。

乗り越へ得る場所は、どう見ても支溝によつて破られた一點と、既に述べたこのクールワールの東約數碼の地點より他にはない。あとはエヴェレストの最大防禦障地で、一面に全く手の着けられない北壁をなして居り、その全部が條痕の這入つた石灰岩で所々オーヴァハングとなつてゐる。グレイト・クールワールの上部は私に、ノース・ウエイリスのリウエッドにある中央ガリーの有名なピッチを憶ひ出させた。

疲労と高度が私の判断を歪めてゐたかも知れないが、二つの事だけは確かであると思ふ。

第一はノルトンのルートの可能性で、彼が「ダイヤル」と呼んでゐた岩板に雪が全く無い場合、そこを支溝まで横切り絶頂の側面に攀じ登るのはさう大して難しい問題ではない、といふ事。

第二は、同じ其の場所に雪が積つた場合、最早通れる見込みが全く無くなるといふ事である。

然しどつち道、此の部分の登攀は假令ベスト・コンディションの許にあつても登攀者の體力をトコトンまで要求すべき場所である事には疑ひがないと思ふ。

(續)

× × ×



山の名の地名 (一)

白馬 耕

之から記して行きたい、山名、山中地名などに就いては、成る可く自分の推斷をきき、今まで發表されてゐる事項を列記して見たい。併し時に臆測も逞しうするかも知れない。何れにしても、餘り考證學にならない観点から筆を進めて見る。之等に就いて大方の意見が續々出て、机上談義に花を咲かせて頂きたいのが愚生らの望みの一つでもある。

一 スバリ岳

標高二七四〇 所在地、越中・信濃 (日本山岳會「山日記」所載、山岳高度表による、以下同じ)

秋田縣仙北郡檜木内村地方では尾根又は山中で左右が岩崖にて狭まれた險阻なU字形のところをシバリ又はスバリと云つてゐる (山日記「山岳語彙」参照)。北秋田郡阿仁合銀山

の近くに磐熊シバリといふ山峽があり、シバリに山峽の字を宛ててゐる。(陸測五萬分一地形圖、阿仁合)。尾瀬只見川地方で、澤が狭くなつて小さい瀧など懸つてゐる箇所をスバリと呼んでゐる (針葉樹二號)。

「コスバリとは小狹とも書かれて

國境と黒部川との最狹部を意味してゐるのである。スバルとは越中では小さく縮まる、又小さく詰められる意味を有するのであるから、コスバリなる意味は前記の如きであると思ふ。之を現境に求むれば赤澤岳スバリ岳の間であり、スバリ岳はこの古名稱の遺存と思はるゝのである。余をして一地點に求めしむればむしろ赤澤岳を取りたいのである」と中島正文氏は述べる (山岳「三十二年一號」、黒部奥山と奥山廻り役)。尙、「三州測量圖籍」すらも後立山に到る間に赤鬼ヶ嶽を獨立させ、針ノ木峠に到る間に僅かに樺山、コスバリなる名稱を新らたに現出して居るに過ぎない。此の以後は測量部の五萬分の發行さるゝまで別段の變化が無い譯である。

次にまた、方言としてのシバリといふ語の説明をあげれば「矢概のシバリ、小柳のシバリ等と言ふやうに山中の深目の非常に狭くなつて、川の屈曲してゐる場所などに附けられる名で、往々にして傳説を伴ひ、大聲を發すれば雨が降るとか、其淵の中にヌシがあるととかの水神に關した説話を保存してゐる。シバリはセマ

イ又はセバマルの語から出てゐると思ふ」とある (田中喜多美著「山村民俗誌」)。この語に關する地域は岩手縣岩手郡磐石村で駒ヶ嶽の山麓にあつた。然も之は峯においてのものでなく、澤間における例示である。

二 爺岳

標高二六六九・八 所在地、信濃越中國境

この山は大正元年測圖版 (陸測五萬分一) には祖父岳 (振假名無し)、その後の昭和五年及六年修正測圖版には爺子岳 (振假名ヂイ) と記入されてゐる。

「圖籍」筆者註、三州測量圖籍、文政四年七月石黒信由翁) には後立山の南に樺山が聳えて居る。これは爺子岳のことであらうか、この樺山の南は針ノ木峠であるが、この間にコスバリなる地點の記入がある。…… (前項一、引用文につゞく) (山岳「三十二年一號」中島正文氏) とあり、同氏の作製された黒部上奥山概念圖には樺山まで針ノ木峠の方から當時の奥山廻り役山道がつけられてゐる。若し、こゝにいふ樺山といふ當時の呼稱が正しく現在の爺子岳にあつたとすれば、樺山と呼ばれた理由は恐らくこの山に樺樹の多くあつた事からの命名であらうか。

處で一方、この岳を見上げてその山麓の安曇の村に生活してゐる農業者との間に、どんな交渉があつたかを見ることにする。「祖父 (ヂイ) ケ岳に種蒔爺さんの姿が現はれると、

軍機保護法の施行と撮影等の注意

(一)

「山日記」より

軍機保護法 (昭和十二年八月十四日公布) により寫眞撮影、測量等が禁止制限されてゐる。軍港、要港、防禦港、保壘、砲臺、防備衛所其他國防の爲め建設したる防禦營造物、軍用艦船、軍用航空機、兵器其他各般の軍事施設及び其の周圍の地域は勿論、其他の場所でも下記の様な禁止制限があるから登山者各位は山岳寫眞の撮影等に際し、次の法文抄録熟讀の上違反する事の無い様充分注意されたい。

軍機保護法第十二條

陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ防空其ノ他國土防衛ノ爲軍事上ノ秘密保護ノ必要アルトキハ命令ヲ以テ空域、土地又ハ水面ニ付區域ヲ定メ左ニ掲グル行爲ヲ禁止シ又ハ制限スル事ヲ得

一、其ノ區域ニ於ケル航空
二、其ノ區域内ノ氣象ノ觀測又ハ其ノ區域内ノ水陸ノ形狀若ハ施設物ノ狀況ノ測量若ハ空中、高所ヨリノ撮影又ハ其ノ複寫若ハ複製

前項第一號ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處シ同項第二號ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者ハ三年以

下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス
第一項第二號ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反スル行爲ヨリ生ジタル圖書ヲ他人ニ交付シタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ圖書ヲ公ニシ又ハ外國若ハ外國ノ爲ニ行動スル者ニ交付シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

軍機保護法施行規則 (陸軍省令第四十三號) 第五條

軍機保護法第十二條第一項ノ規定ニ依リ左ニ掲グル行爲ハ之ヲ爲ス事ヲ得ズ、但シ第一號又ハ第二號ニ掲グル行爲ニ付テハ陸軍大臣ノ、第三號又ハ第四號ニ掲グル行爲ニ付テハ行爲地要塞地帯内ニ在ルトキハ當該要塞司令官、宇品港域ニ在ルトキハ陸軍運輸部長、其ノ他ノ場合ニ在リテハ行爲地ヲ管轄スル防衛司令官又ハ師團長 (防衛司令官ノ管轄地域内ノ師團長ヲ除キ、朝鮮ニ在リテハ朝鮮軍司令官、臺灣ニ在リテハ臺灣軍司令官) ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラズ

一、左ニ掲グル區域ニ於ケル航空 (區域省略)

苗代の種子蒔時である。平瀬麥雨氏の「松本と安曇、一三二頁」に、爺(デ)ヶ岳二六七〇米突の稱呼に付ては理由がある、晩い信濃の春も暮れて行く頃、南の峯と中央の峯との間、白澤(シラザハ)の上部幅廣い谷に積つた純白の雪に一點の黒斑が滲み出すと、此れが爺を持つてゐる老爺形に見えて来る、所謂種蒔爺さんは之れである、山の名はかくして名付けられたのだ、やつと種蒔爺さん出る様になつて好い陽氣になりました——長い冬に飽き果てた爺の人達がそろそろ種蒔の支度にかゝる頃

の挨拶の言葉はかうである、爺ヶ岳は最も大町の人達に馴染の深いなつかしい山である「小池直太郎氏編、小谷口碑集」。

残雪型に大體二つあるが、之は雪の消えた跡がその形を表はす方のものである。山麓民の農事と結び付いたこの種の残雪型は他に類例が多いが、これはその形から此の山名が生れた良い例であると思ふ。

このことは北安曇郡平村の習俗として、「爺が岳の雪の消え際に種を蒔く爺さんの形が現はれる。種蒔き爺さんが出た、といふことは何よりたしかな層であつた」と「北安曇郡郷土誌稿」第三輯にも記してある。要するに、山麓の村民は古くから此の山に對して斯のやうな交渉をもつて居たのが知れ、且つ山名がいつともなくその土地の者から唱へられ、この住民の呼稱が測量部の役人など有識

者に拾はれてそのまゝこの山の名として固定したものと思はれる。山下においての呼稱が、山上にあげられたといふ例は恐らく多いのである。しかし、高頭式氏編纂の「日本山嶽志」には、祖父嶽(標高凡八千五百

エヴェレストには果して固有なる西藏名ありや

吉澤 一郎

一八〇〇年、ラムトン大佐(Colonel Lambton)に依つて創設された印度測量局は、エヴェレスト(Sir George Everest)の時代になつて三角測量の範圍を着々ととして擴め、一八五二年のウオーフ(Sir Andrew Waugh)の時には既に、印度北邊の多くの無名峯が觀測され、之に一々番號が附けられて行つた。その時の「第十五峯」といふのが、今日のエヴェレスト峯である。探險初期の時代にあつてはゴウリサンカールの名を以て呼ばれてゐた(この山はエヴェレストより百哩も離れた場所にある)このエヴェレスト峯は現在西藏名としてチョモロンモ(Chomolungmo)——雪の女神といふ意味——といふ名稱が一般に用ひられてゐるやうである。然し此の事につき慶應の「登高行」最近號(第十一號)に、本郷氏が非常に興味ある英文を引用せられてゐるのを見たので、同學先輩早川義郎氏を介し、本郷氏の御許しの許に同山岳部備へ付けのスクラップブックを拜借した。次に掲げた摘譯はその原文から直接譯したもので、何かの御參考になれば幸ひである。尙之は英國のエヴェレスト遠征には非常に關係の深いベル(Charles Bell)氏が、ロンドン・タイムスに寄せたものである。

主筆殿 御中

「エヴェレストには果して固有なるチベット名ありや」之は私が屢々質ねられた問題であります。昨年私は西藏を五ヶ月程旅行して此の問題に對する探究を爲す機會を得ました。其の結果として現在私の抱いてゐるものは「エヴェレストに西藏名あるは疑ひなき事實なり」といふ結論であります。

一九二〇年、私がラサに滞在中ダライ・ラマは私に最初のエヴェレスト遠征に對する許可を與へて呉れました。同時にダライ・ラマは同山を

尺、信濃國北安曇郡、越中國下新川郡ニ跨ガル……と樺山(標高凡七千尺、所在地は同上……)とが並記されてゐる。上述、中島氏の記文と比較しても面白いが、一つこの邊で諸氏の示教を仰ぎたい所だ。(續)

二、帝國ノ領土及其地先三海里以内ノ海面上ノ空域ニ於ケル雲ノ高さ雲ノ厚サ、霧、煙霧、大氣ノ透明度又ハ地表百米突以上ノ空域ニ於ケル氣流、溫度若ハ濕度ノ實況ノ器具機械ヲ以テスル觀測(觀測成果ノ作成ヲ含ム)又ハ觀測成果ノ複寫若ハ複製但シ船舶ノ航行又ハ航空機ノ航空ニ必要ナルモノ及官公立ノ氣象ノ觀測所ニ於テ行フモノ又ハ官公立ノ氣象ノ觀測所ニ報告又ハ通報スル爲行フモノヲ除ク

三、左ニ掲グル區域内ノ水陸ノ形狀若ハ施設物ノ狀況ノ測量(測量成果ノ作成ヲ含ム)又ハ測量成果ノ複寫若ハ複製但シ地目地類ノ變換、土地ノ分合、境界ノ確定又ハ家屋倉庫ノ新築、改築、増築ノ爲必要ナルモノ及船舶ノ航行ニ必要ナル測深及方位測定ヲ除ク

イ、北海道東部近傍

千島國ノ全島嶼
花咲郡ノ全域
根室郡ノ大部(和田村ノ一部ヲ除ク)
厚岸郡ノ大部(全町村共各一部ヲ除ク)
野付郡別海村ノ一部
川上郡標茶村ノ一部
釧路郡 釧路村、昆布森村ノ各一部

ロ、樺太北部近傍

北緯四十九度二十分以北國境ニ至ル樺太

ハ、宗谷海峡近傍

北緯四十六度十分以南ノ樺太
北緯四十五度十分以北東經百四十二度十五分以西ノ北海道本土

ニ、室蘭近傍

北緯四十二度二十六分三十秒以南東經四十一度七分以西ノ室蘭市、有珠郡及幌別郡

ホ、津輕要塞近傍

北海道

函館市ノ全域
龜田郡 戸井村、錢龜澤村ノ各全域、湯川町、七飯村、龜田村
大野村、尻岸内村、榎法華村ノ各一部
茅部郡 森町、尾札部村、鹿部村、白尻村ノ各一部
上磯郡 木古内村ノ全域、上磯町、茂別村、知内村ノ各一部
松前郡 福山町、吉岡村ノ各全域、大澤村、福島村、小島村ノ各一部
檜山郡 上ノ國村、厚部澤村ノ各一部

青森縣

下北郡ノ大部(田名部町及東通村ノ各一部ヲ除ク)
北津輕郡 小泊村ノ大部、内湯村ノ一部
東津輕郡 一本木村、平館村ノ各全域、蟹田村、三厩村、今別

繞る地方即ち Iho Chanolung (南
方の島の國)に關する記述ある一葉
の紙片を手渡して呉れました。其の
後ダライ・ラマの秘書の一人が私に
話して呉れたのは次の様な事柄であ
ります。即ち

「紀元七世紀頃 Song Tsen Gam
Po. といふ西藏の大王が同地方に鳥
の聖堂を建立した。その事實は大王
統治時代の尨大なる歴史書たる The
Hundred Thousand Jeweled Orders
の中に記録されて居り、それからチ
ヤモン即ち鳥の國といふ名稱が由
來して居るのであります。所が幾世
紀かの間にその鳥の聖堂は忘れられ
て了ひ、新しい名稱が使用せられる
に至りチヤモンは前記の地域のほ
んの一部に限定せらるゝのみとなつ
た。」

と云ふのであります。

エヴェレスト遠征隊員中に此の山
の名稱として Chomolungma といふ
のを採用してゐる人のあるのを見ま
す、現地にあつた此等の人々の意見
は勿論大いに尊重せられなければな
りません。が然し此等の人々が何の
程度に西藏語を話し得るか、或は各
種の西藏文字を読み得るか、私は知
りません。兎もあれ、私には此の名
稱を受入れる事が不可能の様に思へ
るのであります、これからその理
由を明らかに致します。

昨年私が西藏を旅行してゐる際、
エヴェレストへ行つた事のある多く
の人々に遇ひました。その中の數人

はエヴェレストの直ぐ近くに住んで
ゐた人々であります。此の中に現在
Chanolung として知れてゐる地方
からは僅かに一日行程の所に家を持
つてゐるバリーの地方官 (Zongpen
of Bari) が居りました。彼はエヴ
ハントを Kang Chanolung 即ち

「鳥の國の雪」と呼んで居りました。

此の名稱は、八百年以前殆ど裸體で
氷の山の洞に住んでゐた西藏のさる
詩聖を祀つた土地である Lapchi に
禮拜の爲めにやつて來、エヴェレス
トの近くを通り過ぎた、Chumbi 溪
の尊敬すべきラマ僧によつて、勝手
に與へられたものであります。此の
名稱は同じく附近の地方官によつて
も與へられてゐます。私の西藏旅行
に屈從した使用人チャンバはエヴエ
レストから馬で一日以内の所に住ん
で居ました。彼も此の名稱を使用し
てゐました。彼の従弟は二十一年間
ロンブーク僧院のラマ頭の侍者であ
りました。此の僧院はエヴェレスト
に近くその全容を見得る位置にあり
ます。

チャンバが云ふにはそのラマ僧も
侍者も同じ名稱を使用してゐたと
の事でありました。チャンバも尙附加
へて居りましたが、私も亦その名稱
を知つてゐる他の人との會話の中で
それ等の人々が、Kang を略して單
に Chanolung とのみ云つてゐるの
を屢々耳にしました。然し一番正し
くのは Kang Chanolung 或は Cha-
molung Kang 又は Chanolung Ka-

なり-Kang には「雪の山」の意——
である、とその人々が云つて居りま
した。最初の形が最も普通でありま
す。Kang Rinpoche——貴重な雪
の意——も同じ例でありまして、此
の山は西藏中での最も神聖な山で印
度人及他の國々の人には Kalas と
して知られてゐるものであります。

第二の形と同じものにはラプチ地
方の雪の山といふ意味の Lapchi
Kang があります。私が話し合つた
他の多くの人々はエヴェレストに對
して此等の名稱を與へてゐたのであ
ります。

エヴェレスト附近の住民の内に、
それを Chanolung 或は Chomolung
と云つてゐる人々のある事も事實で
あります。此等の人々はこの名稱の
由來を知りません、そしてチャンバ
が云つた様に Chomo はチャモより
も口からの出方はすつと早いのであ
ります、而も人々は Chomo Ihari
とか Chomo Yummo 等の山名を知
つて居る關係上、チヨモが一般的
で、しかも否は容易しい言葉の方へ
走り易いといふ事もあるものであり
ます。然し總ての人は、本や紙に書か
れた名稱が正しいものである事を認
めて居ります。

村ノ各大部、蓬田村、小湊町ノ
各一部
へ、東京重要近傍
横濱市 磯子區ノ大部、中區ノ
一部
横須賀市ノ全域
三浦郡ノ全域
鎌倉郡 鎌倉町、大船町、本郷
村、深澤村ノ各一部
北緯三十五度十分以南東經百四
十度以西及北緯三十五度二十分
以南東經百三十九度五十六分以
西ノ千葉縣及同縣君津郡青堀町
ノ全域
北緯三十五度以南東經百三十九
度以東ノ靜岡縣
東京府伊豆大島ノ全域
ト、小笠原群島近傍
伊豆七島中八丈島及小島
小笠原群島ノ大部
チ、舞鶴重要近傍
東經百三十五度以東北緯三十五
度四十分以北、東經百三十五度
十分三十秒以東北緯三十五度二
十分以北、東經百三十五度三十
六分以西ノ京都府(與謝郡上宮
津村、宮津町、府中村、世屋村
野間村、吉津村、岩瀧町、日置
村及中郡五十河村ノ各一部ヲ除
ク)及福井縣
福井縣大飯郡 本郷村、大島村
和田村ノ一部
リ、由良重要近傍

北緯三十四度十分以北東經百三
十五度四十分以西ノ和歌山縣及
大阪府(泉南郡下莊村、西島取
村ノ各一部ヲ除ク)
北緯三十四度八分以北東經百三
十四度三十分以東ノ徳島縣
徳島縣那賀郡椿村ノ一部(辨天
島、棚子島及其ノ附近ノ島嶼ヲ
含ム)
兵庫縣津名郡安乎村平安浦——
同縣三原郡津井村雁來岬突端ヲ
連ナル線以南ノ淡路島
又、島前近傍
北緯三十六度十分以南東經百三
十三度十五分以西島前ノ全域及
島後ノ一部
ル、吳重要近傍
北緯三十四度二十分以南、北緯
三十三度五十分以北東經百三十二
度十五分以東、東經百三十二
度四十五分以西ノ廣島縣、山口
縣(大島郡前島附近ヲ除ク)
愛媛縣(四國本土ヲ除ク)
(廣島縣) 廣島市ノ一部
佐伯郡 廿日市町、平良村ノ各
全域、五日市町、八幡村、井口
村、觀音村、原村、宮内村、地
御前村、大野村、友和村、砂谷
村、玖島村ノ各一部
安藝郡 熊野町、矢野町、船越
町、海田市町、府中町、昭和村
坂村、奥海田村ノ各一部
賀茂郡 中黒潮村、下黒潮村、
熊野跡村ノ各一部(續く)

扱て最後に残るものは西蔵政府が各エヴェレスト遠征隊に與へた入國許可證であります。それは現在ロンドンの王立地學協會に保存せられてあるものであります。私はその原本を仔細に研究し數ヶ月前までは寫眞に撮つた寫しを持つて居りました。此の證書の中でその名稱が出て來る場合必ず Chomo ではなく Chamo であつた事を瞭り記憶して居ります。シツキムの行政事務官が之等の證書によつて作つた英語の音譯には Cho となつてゐる Cha ではありません、然し西蔵の寫本を讀み得る人には之が誤りである事は明らかであります。其處では Cha と讀まれ Cho とは讀まれません。何となれば a と o との相違のみならず Cha と a のは鳥の意味で Pya と書かれ Cho は君主の意味で Cho と書かれます。文字が全然違ふのであります。

Chanolung と Chomolung とする誤譯に關する同様な例は、西蔵語には度々見られる現象であります。譬へば人名たる Song Tsen Gampo は Khenpo と誤つた發音をされてゐます。ケンポは僧院長を意味します。然しソン・ツェンはさうではありません。神性ある Chenrez の一化身ではあります、彼は俗人であつて僧侶ではなかつたのであります。教育をうけた西蔵人でケンポを正しい名稱であると主張する人はありません。年代を経た萬年雪が神聖視されるといふ點から云へば、エヴェレスト

トは決して神聖なものではない、従つてその西蔵名が、永い間世に出なかつたといふ事にも一應の理由があるものであります。然しエヴェレストの正しい西蔵名が The Snow of Bird Land の意味を有する Kang Chamolung である事には疑ひの餘地がないものと確信するものであります。

ペンにて
チャールス・メン



◆會員通信◆

ウエスタン氏よりの便り

最近會長木暮氏宛にウエスタン氏より左記の様な通信がありました。

Alpine Club

74 South Andley St.,

London W1

May 5/38

Dear Mr. Kogure,

I am sorry to say I do not remember if I properly acknowledged your kind letter together with the photographs of the bronze tab let put up in my honour at Kamikochi which you sent me some ago. I greatly appreciated them and not only was the honour done me most gratifying, but as a proof of the friendship and affection of my old friends in the Japanese Alpine Club. I value their skill more highly.

Please forgive me if I did not acknowledge your kind courtesy earlier, but I think you will realize and understand that I have not been able during the last few months to do as I should have wished.

May I send herewith a copy of a photograph taken in the Alps, one of the last occasions when Mrs. Weston were together there with the 3 brothers, Mami in the Kiental—we had not on our own Alpine 'Kit' at the time, I may say.

With my sincere regards and greetings to all members of the J. A. C. who know me.

Yours very sincerely

Walter Weston.

耳二、茂倉、武能小屋

皆様御變りありませんか、私は昨朝土合着、朝の間は霧がありました。九時トマの耳に着きました。途中迄三組許りのパーティーが來ましたが足を痛めたり、引返したりしたので一組丈け上に來ました。

九時二十分に出て、十一時には茂倉岳頂上に來ました。一ノ倉と茂倉の間は草原で、雪田があつて、實に氣持の好い處です。一時に蓬峠、武能小舎でユツクリ休んで五時二十分の下り列車に樂に乗りました。十時頃から霽れて、朝日岳、萬太郎、仙ノ倉邊が見えました。

六月二十日 新潟にて

P. M 生

神河内状況報告

今年六月十七日——廿一日間、本學山岳部、夏季合宿準備の爲、徳澤神河内へ入りました。今シーズン前の豪雨により六月十七日には神河内行バスは奈川渡迄しか入れませんでした、その後復舊工事が進捗して二十二日には神河内へ入れるとの事でした。途中産屋澤は徒歩連絡でしたが今年七月下旬からそこに今年だけ間に合はせるの工事を行つてバスを通す筈であり、来るオリンピックの年までには、完全な縣管道路を作ることになつたさうです。徳本峠は殆んど完全でした。梓川は今年も増水して、河童橋以外の、その上流附

近の橋は皆落ちて了ひました。七月上旬迄には復舊するさうです。

今年の運送費は大體次の通りです。神河内、島々間のバスは昨年通りで値上げせず。但しハイヤー、トラックはガソリン統制の爲に昨年の二倍位値上げしてゐる。島々、神河内間の運送費、一貫目約二十五錢。神河内、潤澤間の運送費、一貫目約四十錢——四十五錢。之は未だ確定してゐない。昨年は四十錢であつた。

東京商大 一橋山岳部

立山地方事情

先日富山市に於て名鐵局主催の夏山登山打合せ會があつた、其際の話題と感じを少し書いて見る。

扱本年は立山方面(組合長佐伯靜男氏)黒部方面(世話人吉澤庄作氏)共案内人夫が少ない、時局關係では特に本縣文が多いといふ事もあるまいが然し都會方面とは較べものにならない、軒並に勇士を出してゐる處もある、それに有米縣電、黒部日電、兩發電關係に相當多量吸集されてゐるから案内、人夫、擔夫共皆不足する模様である。

内閣の方針を受繼いで取締警察側では値上を許可しない方針とあれば餘計都合が悪い(賃銀値上は引續き陳情してゐるから許可されるかも知れん)登山者はたゞ電報や葉書で依頼した丈では希望が達せられるとは

請合はれぬ、是非共入用の場合には餘程慎重に當らねばならぬ。入手出来なかつた場合も考へて必要がある。

次に休泊所關係は昨年少々値上許可になつたので本年は其儘でやる由であるが何分擔夫の不足と直接物價騰貴とは必ずどの方面かに現はれ、又配給補充も圓滿に行かぬだらう、是は致方ない事情だと察せられる、この際こんな注意が促される、山に慣れない人、人夫をこなせない人が亂暴な金の使ひ方をしたり人夫に悪い癖をつけさせたりしては金のある人も、ない人も行く、自由の天地、或は聖地とも云ふべき所に弊害を残す事になる、深い事は知らぬが何か晝間人夫に酒を飲ませた爲め客にどうしたとかかうしたとかいふ話が相當賑つた所を見ると、心得て置いて悪くはない。

富山縣では縣としては山に對してどれ程の施設といふ施設もして居らぬ、宮様の御登山の折には俄かに道の手入、小舎の清掃、大名行列等やるが、平時は電氣局からポスター、寫眞、照會回答等便宜を計つてゐた、多少の經費もあつた様である、處が電力管理案で折角の施業も財源もなくなりではぬかといふので不安で一杯であるらしい、これに反して營林署は相當恒久的に手入管理に盡してゐる事は一般に認められてゐる通り。

現在縣内での登山行事は學生とか

青年とかのものは微弱であつて信仰登山が大部分である、青年の登山でも學校主催の登山でも登山の主要位置が「立山詣り」といふ觀念で占められ、山の自然に對し大自然の景觀に對し、或はコースに關し、登山の訓練に於て殆んど將來に對する希望伸力が認められない、立山、劍へでも二度行かうとは仲々せぬ、立山は靈山たる事に間違ひはないが將來の登山の發展から見れば少くとも山小舎と山案内の制度で舊來の「立山詣り」から脱却したものにならねばならぬ。

(一三、六、一五)

石黒清藏

◆夏山情報◆

調査部

例年の如く山日記編輯のために全國各地の山小屋山案内に關する問合せ書を發送し、併せて夏山の諸施設の調査をした。その結果は既に山日記に發表されてゐるが、編輯の切後に報告されたものもあるもので、その追補の意味をも含めて、こゝに一括することにした。

山小屋宿泊料及び案内料は全國的に見て、一割—二割の値上りの状態にある。然し北アルプスの豊科警署管内の山小屋案内料金が前年通りと決定されたのは時節柄有難い。案内者の中には應召により不在の者も少くないと思はれる。山日記では報告により判明した分は特に

「不在」と但書してあるが、之は極く少部分である。今年は案内者を指名して雇ふ場合には特に豫め問合せをする必要がある。

交通機關、特に山麓のバスは燃料の使用制限の爲に、各地より報告された通りの料金及び回数が實行されるかどうか、案じられる。

北アルプス

◆白馬岳—バス大町四谷間四〇錢 四谷二股間三〇錢。二股沼池尻間貸切二圓。白馬頂上村營小屋一泊二四三〇錢、辨當四〇錢。二棟新設され、夏期中白馬郵便局が開かれ、無集配三等郵便局の事務一切並に記念スタンプの取扱、及び無線電話開設。其他の小屋宿泊料は白馬頂上二・三〇、山莊三・五〇以上、鏡溫泉二・三〇、唐松三・〇〇。案内日當二・五〇

◆針ノ木、高瀬入り—大町葛溫泉間貸切三・五〇、大町案内料二・五〇。小屋料、大澤二・〇〇、針ノ木二・二〇、種池二・〇〇、冷二・〇〇、八峰三・〇〇、葛溫泉一・五〇以上、餓鬼二・五〇、濁一・九〇湯股二・四〇、烏帽子二・三〇、水品二・五〇、三俣二・七〇、双六二・六〇。

◆燕、常念、槍—バス有明驛一ノ瀬六〇有明濃坂間貸切六・〇〇。豊科須砂渡間バス二五。小屋料、中房一・五〇以上、燕山莊二・七〇西岳二・五〇、常念二・二〇、槍殺生、大槍、槍澤、一俣各二・五

○。案内二・二〇暴風雨、滞在二割引。岩登り三・〇〇、穂高二日縦走日當二・五〇、一日縦走三・〇〇以上案内料は有明、常念口、大瀧口(三田村)大野川、烏々各支部共通。

◆松本、上高地—バス松本上高地間二・〇〇往復三・七〇、一日十回烏々より五〇安、烏々始發午前五、四〇分、上高地終發午後五時、澤渡白骨口間二〇。松本淺間溫泉間二〇。宿泊料、松本驛前一・五〇以上辨當三〇淺間一・五〇以上。小屋料、中ノ湯、白骨一・五〇以上、上高地旅館二・五〇以上、帝國ホテル二・五〇以上、燒一・七〇、大瀧二・二〇、德澤二・三〇、穂高二・六〇、槍平二・五〇、槍見一・八〇以上、笠二・四〇、尙穂高小屋は昨秋改築された。

◆黒部川—宇奈月鐘釣間日電軌道一・〇〇、一日三回、宇奈月始發午前八時、鐘釣終發三・四四分、宿泊料宇奈月二・五〇以上、鐘釣二・〇〇、祖母谷二・二〇、清水一・三〇平二・五〇。

◆劍、立山—バス上市極樂寺間二五、一日十回 宿泊料、藤橋一・三〇以上稱名一・七〇 弘法追分一・八〇 天狗平一・六〇 室堂二・五〇 劍御前二・二〇位 劍澤二・三〇 池ノ平一・八〇(辨當付)五色二・五〇。

中央アルプス

伊那電鐵自七月一日至九月末日電車

は登山者五割引引道往復共

◆伊那町口—伊那町驛、内ノ萱間貸切五圓、伊那町横山間貸切三・五〇 物表味噌百匁一〇 米一升三四 草鞋八 杖二五 辨當三〇案内料二・二〇 日辰三・五〇雨中、滞在三割引。

◆宮田口—味噌一〇 草鞋八 杖二〇 辨當三〇 案内料右同 駒ヶ根樂園キャンピング場に於て貸テント便あり、三人用六〇 四人用八〇 六人用一・二〇 申込宮田山岳會

◆赤穂口—赤穂驛光前寺間貸切二・五〇 米一升三三 味噌一〇 草鞋一〇 案内料右同

◆西駒頂上小屋料—宮田小屋一・八〇 半泊一・三〇 食事無七〇 中學生團體四〇 小學二〇 辨當五〇 飯一椀一〇 味噌汁五 草鞋一二 飯盒煮料八 伊那小屋泊一・三〇 半泊七〇 食事無四〇

◆飯島口—飯島驛市之瀬橋間貸切三・五〇 同日向小屋東方燒枯迄四・五〇。白米一升三一—三四 味噌一〇 草鞋一〇 案内料右同 越百小屋十二年新設、越百山頂より中小川新道を東方へ約五〇〇米下る地點飯島山岳會所屬收容五〇番人なし。

南アルプス

◆仙丈岳東駒信州口—バス伊那町高遠間三〇、高遠黒河内間四〇、高遠市ノ瀬間六〇。伊那町始發高遠午前六・一〇分、三〇分毎發。

貸切伊那町より黒川七、五〇市

ノ類六・五〇。

市ノ瀬口案内料二・五〇 米三四
味増七 草鞋八 着サ二五

戸臺口案内料二・五〇 物資販賣
店無きも小松傳彌竹澤長衛方にて
米味増分譲す

北澤縣警小屋番人七月上旬より九
月迄滞在、北澤長衛小屋番人六月
より十一月、泊一・五〇——二・〇

〇自炊六〇、辨當三〇、味増一五
草鞋一〇、仙丈頂上小屋番人七月
一日より九月、泊自炊五〇、米味
増分譲す。小瀬戸湯泊五〇より。

〇鹽見、赤石方面——バス大島驛峠
間屋間運轉中。大島鹽見及大河原
間貸切六・五〇、尙上記區間バス
申請中にて料金は一・二〇往復二・

〇〇大河原口案内料二・五〇 雨
中番人ある小屋滞在二・〇〇 大
河原旅館泊一・五〇より中食三五
より米三五 味増一〇 草鞋八

杖二〇 鹿鹽口案内料二・五〇
雨中番人ある小屋滞在一・五〇
物資右同 旅館泊一・二〇より中
食三〇より辨當二五。

荒川、三伏峠、廣河原各小屋番人
七月一日より九月中旬滞在、小屋
料薪代として四五(寢具ナシ)食糧
は大部分準備あり米一升荒川七〇
三伏六〇廣河原五五

〇遠山川、聖方面——小川路峠越は
バス伊那八幡驛上久堅間運轉、上
町口案内料二・五〇 旅館一・二〇
より中食三〇より米三八、味増一

〇、草鞋八。

加賀白山

〇市ノ瀬口——バス白山下驛市ノ瀬
間登山者に限り一・四五 案内料
日歸三・三〇夜がけ四・五〇泊り山

間一・〇〇、貸切石徹石迄二・二〇
〇、バス勝山谷間八五、案内料泊
り山六・〇〇。

〇平瀬口——省營バス越美南線北濃
驛牧戸間六五牧戸平瀬間八〇貸切

時出張所事務取扱。
奥日光尾瀬

〇沼田口——バス上越線沼田驛古仲
間一・四五、沼田始午前九・一〇
分古仲終午後五・二〇分。

白島平瀬間一・一〇〇 牧戸平瀬間
五・〇〇高山牧戸間バス一・八二。

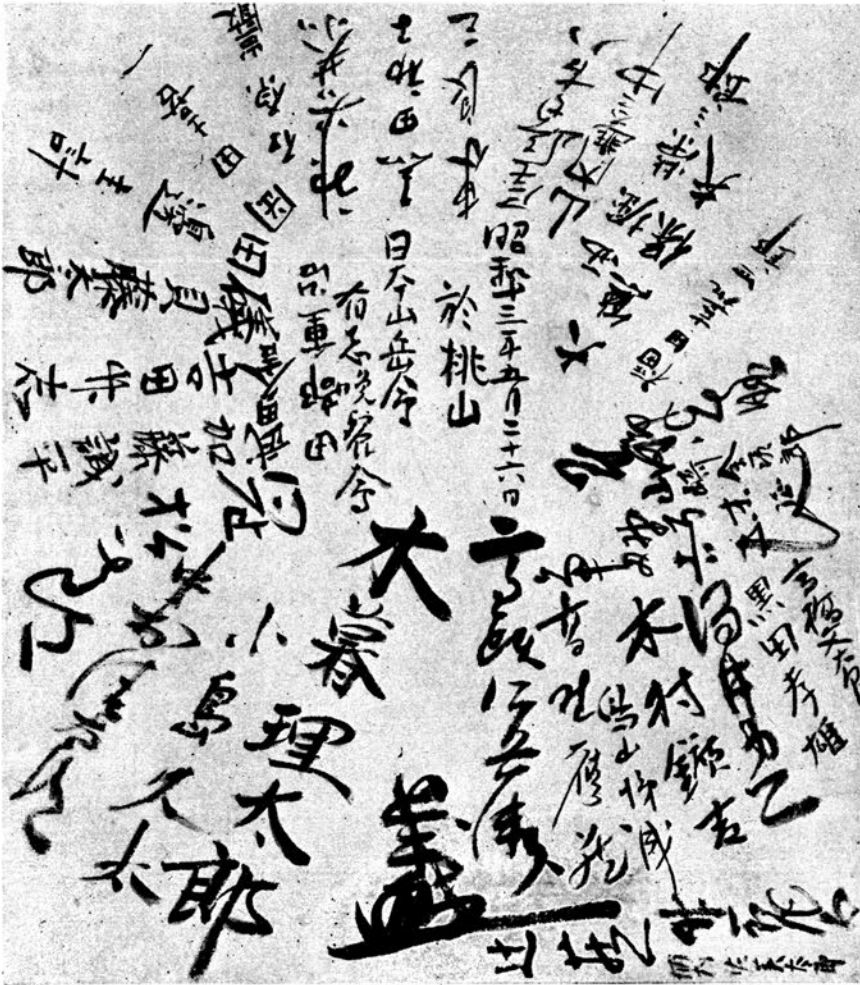
〇頂上室宿泊料泊六〇、休憩二〇
定食六五、辨當三五、毛布貸料四
〇、木炭一貫八〇、白峰郵便局臨

小屋料、長蔵小屋一・六〇 辨當二
〇、米味増薩詰油紙足袋等分譲す
尙尾瀬ヶ原温泉、檜枝岐各小屋料
同上田島口——田島驛檜枝岐間バ
ス運轉、料金不明。

竹節作太、石原巖、浦松佐美太郎、

山桃於 日六十二月五年三十和昭

き書寄會餐晚志有



會務報告

有志晚餐會記事

五月廿六日 午後六時 桃山
久しい懸案であつた辻本、木暮、
高頭三長老の還暦をお祝ひする會員
有志晚餐會を、武藏野の一隅荻窪の
普茶料理桃山で開催。

世話人小島氏のユーモアたつぷ
りな開會の挨拶に始まり、木暮氏が
三氏を代表しての答辭あり、後は懷
舊談に花の咲く盛會であつた。此日
辻本氏は御病氣のため缺席されたの
は誠に惜まれた。午後九時三十分散
會。尙次回晚餐會の世話人は加藤誠
平、辻莊一、野口末延の三氏と決定
當日の出席者左の如し。

木暮理太郎、高頭仁兵衛、小島久
太、武田久吉、中村清太郎、冠松次
郎、島山梯成、高野鷹藏、田部重治
木村鐵吉、辻莊一、酒井忠一、岡田
喜一、加藤誠平、吉田竹志、磯貝藤
太郎、田邊主計、東良三、神谷恭、
山崎金次郎、野口末延、黒田初子、
尾崎喜八、山内豊中、西堀榮三郎、
星野光之助、大熊保夫、福田嘉四郎
竹節作太、石原巖、浦松佐美太郎、

黒田孝雄、高橋文太郎、角田吉夫、
以上三十四名

世話人 小島久太 鳥山惲成

黒田孝雄 中司文夫

關西支部より

關西支部の五月中に於ける來室者は左記の通りであります。

會員 四二名

會員外 四三名

集會(三) 三三名

計 一三一名

集會三回は學聯OB、及び現役、並びに、エーデルワイスの各一回づゝであります。

會員計報

昭和十三年五月二十八日逝去
三五〇 大阪 朝輝記太留氏
本會は茲に謹みて哀悼の意を表す。

新着圖書

アルカウ趣味 日本アルカウ事務所
廣島山岳會報 六月號 同 會
明峯山岳會々報 五、六 同 會
GRK會報 六 かくれい會

歩行 獎健歩行會

東京登歩溪流會々報 六 同 會
岩雪崩 七八 I M C 山岳會
趣味登山會々報 六ノ六 同 會
東京旅行クラブ會報 百四十七號
東京旅行クラブ

日本登攀會々報 一 同 會

松坂屋山岳部々報 同 松坂屋 會

京都山岳 六月號 同 會

奈良山岳會々報 五九 同 會

會報 魚市場山岳會

山幸 阪神山岳會

白樺 同 會

朝鮮山岳會々報 同 會

熊本山岳會々報 六 同 會

山小屋 六月號 同 會

ツリースト 六月號 J・T・B 會

登山とスキー 六月號 其 社

昭和十年度積雪調査 經濟調査所

地學雜誌 六月號 東京地學協會

Natural History June, 1938

Sierra Club Bulletin April, "

The Mountaineer June, "

Appalachia May-June-July, "

The Prairie Club June, "

Centro Alpino Italiano No. 7, "

Die Alpen Mai, "

Geographical Journal May, "

La Montagne Mai, No. 296 "

Bulletin du Club Alpin Avril, "

Tchecoslovaque

會員寄贈圖書

"To the Forbidden Land"

Seven Hedin

以上 黒田孝雄氏

終身會員に變更の件

磯野計藏 塚本純一

右兩氏は四月より終身會員に變更となりました。手違ひにより發表遅延の段御詫ひ致します。

挿繪の説明

第二頁湯淺嚴氏の文中にあるのは立教道征隊員の撮影せるトレイル峠よりのナンダ・デヴィ東峰(右)及び主峰の寫眞を基に會員早川義郎氏が描いた鉛筆畫であります。

第六頁及九頁にあるカットは會員中村清太郎氏の筆になるもの、今後は各方面に御依頼して新しい、又趣味豊かなカットを入れて行き度く思つて居ります。石井鶴三畫伯のも執れ御目に懸ける事が出来ませう。一般會員諸氏からも是非傑作を御送り下さらん事を御願ひ致します。

御見舞

比度關東關西を襲つた豪雨は東京でも思はぬ所に水が出て編輯子杯も東京の眞中で生れて初めて徒渉をやつて了ひましたが、關西殊に神戸では想像以上の被害があつた様に聞きました、幸ひ阪神間に住まはれる會員諸氏には大した被害もなかつた様で、何よりの事と思つて居ります。水野氏よりの手紙には六甲の崩崖を高次雪崩と同じものであると思ひましたが面白い観方であると思ひます。藤木氏も之に就き何か書く筈になつてゐますが、九月號には載せる事が出来るでせう。

◇事務室より◇

山岳製本代が從來の一圓より一圓二十錢(送料本會負擔)に値上げとなりました、御含み置き下さい。

圖書室は月水金が午後五時より九時まで、火木土は午後一時より五時まで御利用願ふ事になつて居ります御間違ひになる方がよくありますから御注意下さい、尙特別の事情なき限り、時間は嚴守下さる様御願ひ致します。

會員各位の住所變更通知は出来るだけ早く御願ひ致します。

會報に就て

會報の御手許に届く期日が不定で甚だ恐縮ですが色々事情もある事なので大目に見て戴き度いと存じます。

八月は休みます代りに七月を十二頁とし、九月は全部原稿が來てゐますから少し早めに發行出来る豫定であります。

昭和十三年七月十五日印刷
昭和十三年七月十六日發行

發行兼編輯者 吉澤一郎

東京市芝區榮平町一(不二屋ビル)

發行所 日本山岳會

電話(四五一六四九)

振替(東京四八二九)

東京市芝區榮平町一丁十三番地

印刷者 植田庄助

印刷所 成文堂印刷所